

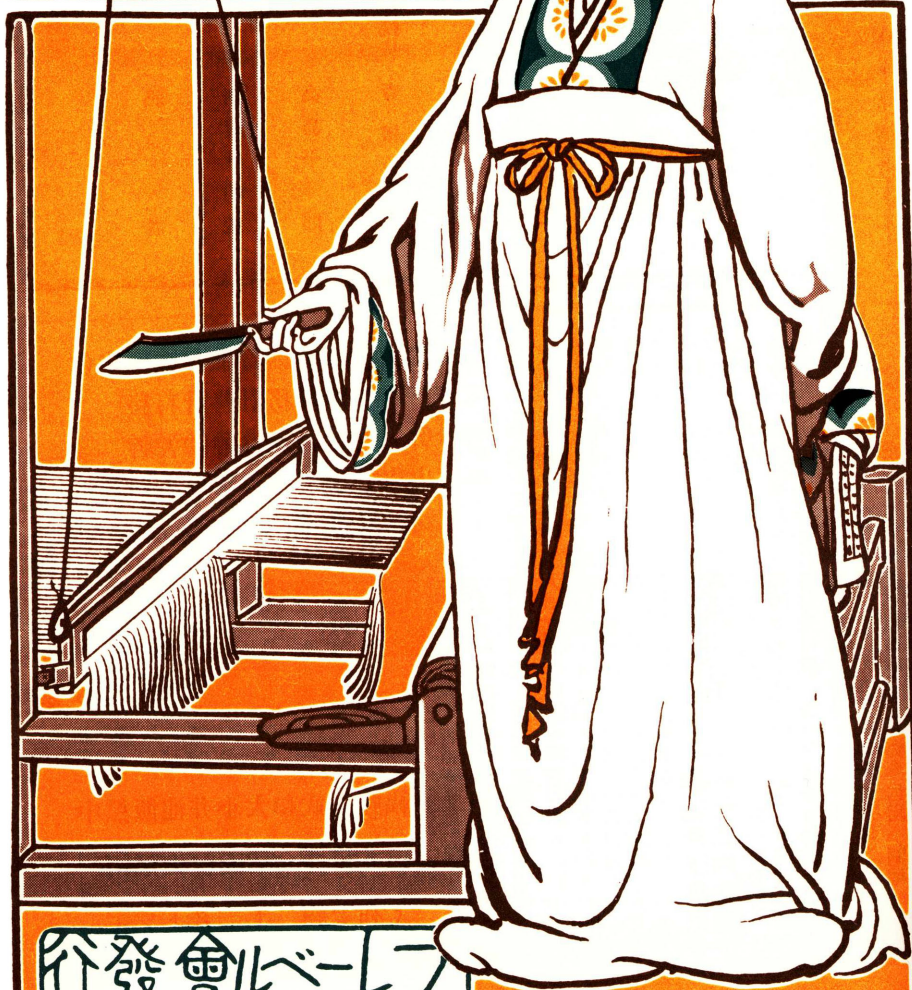


幼 兒 教 育 研 究 雜 誌



女と子も

第拾卷
第拾號



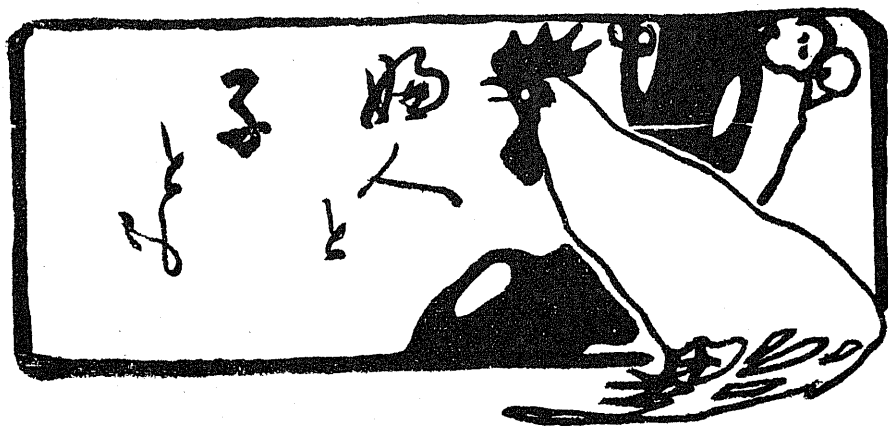
フーバー會發行

○御伽訓話

久留島武彦

①一册郵稅共金拾壹錢 ②六册前金郵稅共金六拾錢
 ③十二册前金郵稅共金二圓拾錢 ④郵券代用一割增

和下雨福藤山武和大小井池飯黒中
田田森田井村井田關關村田沼田川
た ふ利十綱 ト クトシ定二
實づ釧く野枝藏ヨ清ニヨツ治郎



第十卷拾號

日本人の覺悟

朝鮮も今度いよいよ日本と一體になりました、それに就き我國民の責任は、益々重大になりました次第で、形の上に於て既に一體となつた此韓國國民をして、普く皇化に露はしむるには、先づ第一に日本人の韓人に對する覺悟、心得方が大切であると存じます朝鮮人は日本と合邦しました爲に、今後その財産は安全に保つことが出来るやうになりましたが、由來權利思想に乏しく、自分で自分の尊むべきことを知らない國民でありますから、それは教育の力に依らなければならぬのは勿論であります。自分が重んじ好く勵み、好く務め、その生活費の蓄むと同時に收入の道も多くなるやうに計つてやると云ふことは、目下の急務でありませう。

それ故に合邦に就ても、日本の領土が廣くなつたとか、日本の國が膨脹したとか云ふことを喜んで聞かせるよりは、今度日本には新しい兄弟姉妹が殖ゑたと云ふ點を喜んで聞かせ、而も其兄弟姉妹は是迄我々よりも不幸の域に沈淪して居たのであるから、是からはお互に相扶けて、國利民福を進めて行くやうにしなければならぬ、若しも新たに得た一千萬の兄弟姉妹が何日まで今日の儘であつては日本人だけが、どの様に進歩しても、國の發達を遂げることは出来ない、自分一人豪くなつても、兄弟達が平々凡々では、文明の歩調を共にすることが出来ないから、是非とも之を慈み導いて行かればならぬと云ふ道理を、子供の心にも好く解るやうに聞かせると云ふのは、朝鮮に在留する人は勿論、内地の人人にも非常に必要のことであると思ひます。

女子と時代病

新渡戸稻造氏談

▲危険なる思想 時代思潮の著しい變遷に連れて近來一部の女子の間には、一種危険なる思想が流行して來たやうに思はれる、現に先頃某雜誌に出た婦人の書いた小説が、此の危険な破壊思想を含んで居た爲めに、治安を妨害するものとして發賣を禁止されたさうであるがさう云ふ危険な破壊思想——デカダン思想が、世の若い婦人の心を占有して、家庭の破壊者を多く出すやうになつたならば、夫れこそ實に怖る可きものと云はなければならぬ、若しも之が時代の傾向であるからと云つて、打棄て置いたならば、其の害毒は如何なる程度にまで及ぼすか測り知れないのであるから、當局者並びに教育家は、一日も早く此の思想の撲滅に盡さなければならぬ。

▲學者の責任 元來斯ういふ思想が流行するやうになつたのは、近世科學の著しい發達——夫れも

極めて一方に偏した科學の發達に依るものであるが、今の學者も之には大いに與つて罪があらうと思ふ、といふのは現今日本に於て、學者間に尊重されて居るのは、皆獨逸の學說で、科學でも教育でも、總べて獨逸の其等に依らなければならぬやうに思はれて居る、偶々英國若しくは米國の教育でも唱道する者があるならば、其事が既に一種の罪惡でもあるかのやうに考へられて居る、然らば斯様に日本で尊ばれて居る獨逸本國の近頃の社會狀態は、何んな風であるかと云ふに、道德問題などに就いて云へば、佛蘭西などよりも尙一層頹敗して居る風があつて、男女關係の如きは、最も墮落を極めて居るのである、左様いふ國の思潮を歡迎し迎へ而も一方に偏した科學主義を重んじて教育を施す結果は、遂に斯ういふ危険な破壊的思想が婦人の間に迄も流行するやうになつたのであるまいか、此の點に於て私は今の學者等に其の責の一半を歸するのである。

▲常識の缺乏 次に常識の缺乏と云ふ事が、此の思想の流行を大いに助長して居る、西洋に於ても

勿論斯ういふ危険な思想の流行した時代はあつたのてあるけれど、常識が發達して居る爲めに、其の弊害は餘程救はれた、所が今日の日本では、此の大切の常識が甚しく缺けて居る、殊に女子に於て然うである、學校の教育を見ても、中學程度迄は常識の修養と云ふ事が多少行はれて居るやうであるが、夫れ以上になると殆んど全く常識の修養が無い、之は甚だ危険で、一朝破壊主義や虚無主義が流行するやうな事があれば、忽ち其の時代の危険な思想を防止しやうと思ふならば、教育家たる者は、大いに常識の養成に努めなければならぬのである。

▲感情の教育 常識の修養と共に最も大切なのは感情の教育である、今日の教育を見るのに、此の大切な感情の教育が全く無視されて居るのは、甚だ遺憾に思ふ、感情を無視した教育を以て、何うして完全な人を作る事が出来るやう、頭だけ發達した知識ある人を作る事は出来るかも知れないが、人としての全き情を有つた者は到底作ることとは出

来ない、曾て私が感情の教育と云ふ事を論じた時に大いに非難した人もありました、私は感情を全く無視して完全な教育が行へるものではないと信じて居る、今日の教育では感情と云ふものを非常に卑しんで、感情を制する事のみを教へて居るが、感情其れ自身は、決して卑む可きものでも惡むべきものでもない、故に制すと云ふよりは寧ろ感情を美しく清くするやうに教へる事が必要である、即ち教師は心を以て生徒の心を迎へるやうにしなければならぬ、所が今日の女學校の教育を見るのに、此點が全く忘れられて居るやうだ、試みに女學校の生徒を捕へて、學校で教はる課目の内で、何が最も面白くないかと尋ねると、殆んど十人が十人迄、皆修身が一番面白くないと云ふ、何故面白くないかと聞くと、「校長先生は何時も分り切つた事ばかりお仰る」とか「大人に云ふやうな事はかりをお話になる」といふ、成る程教師が修身の教科書を擧げて其の云ふ言葉には、熱もなければ情もなく、只暗記的に修身を講義した所で、生徒に取つては一向面白からう筈もなければ、又

何等の印象も與へないのは當然のことである、況してや修身を講義する自分に道德的信念が堅固でない、何うして生徒の心を動かす事が出来るやう、此の點からしても感情の教育と云ふ事は、最も必要である、教育は單に知識のみを與へるのが其の目的ではなく、一面に於ては感情を清くし人をしめて暖かき心を懷かせるのが、其の貴む可き働きである。

▲宗教の必要 最後に私は現代の人に宗教心の無いといふ事が、斯かる危険な破壊思想に陥り易い一の原因であると思ふ故に敢て基督教とのみ云はなくても、私は現代の青年に是非宗教を勧めたい而うして宗教の力に依つて、斯かる危険な思想を撲滅したいと思つて居る。

西洋の小兒と日本の小兒

高島平三郎氏談

日本の家庭と外國の家庭との小兒の取扱ひ方の相

違は家庭の成立の違ひに基づく、即ち其國、其の國民性の如何に由るのであるから利害得失を論ずる範圍が廣くなる。差し當り西洋と東洋の最も著しい相違點を挙げれば大體に於て西洋には一體の社會組織が個人主義を標準とするから家庭にも亦個人主義が行亘つて居る。

それであるから親が子に對する態度は東洋人の目には殘酷であると思はれるほど獨立させてある。第一に我國では生れた時から母の懷に抱かれて寝るが西洋では特別な場合は知らず平常は湯たんばなどをに入れてやつて別の寐床へ寐させる。成長後も添寐をすることなどはなく幾等泣いても乳とか食物とかを與へた後は一定の時間がくれば必ずベットのの中へ入れる此點は日本人より見れば殘酷に思はれるがやがて獨立的にすべての事を自分でやる習慣がつく基となる。

も少し成長した後には小兒の玩具箱なども皆鍵があつて小兒が十歳位になれば皆ポケットの中に鍵を持つて居て人に手をつけさせぬ又事實手のつけられぬやうになつてゐる。

かくの如くにすべての家庭組織、社會設備が皆自分のことは自分でしなくてはならぬやうになつてを。然るに日本では全く反對であつて殊に老人の居る家では非常に子の愛に溺れあれやこれやと世話を焼いて少し泣けばすぐ乳をやるとか機嫌をとるとかし終には小兒が泣けば何でも與へる習慣がつき小兒の時から人を頼みに生活するやうになる。

又稍成長した後でも自分で自分の事を仕末し又自分の所有の權利を認めて互に人の所有を尊敬する念が薄く親子兄弟の間が互に物を共有する様になる點は感情の美しさが見える様であるが弊に走れば所有の觀念が明かになく自他の區別がぼんやりして自信自據の精神を鈍くする基となる。日本の政治家でも學者でも殊に實業家など皆夫々贅縁の所あり門閥學閥の力に由ること多く眞に自己の力に信頼することの少いのは全く小兒の時の家庭教育に已に芽ざしてをるのである。

然し乍ら日本のかういふ風を今急に改めて西洋風にするには有ゆる組織から更へなくてはならぬ

故家庭教育のみ勵行することは難い。たい自分が家庭に望むのは此點が日本の家庭の短所であり長所でもあることを忘れず感情と理智の調和を謀られたき事である。

東洋と西洋との家庭に於ける今一つの相違は自分に對する人格的觀念の相違である。西洋人は個人主義の立場に立てば我子と雖も一個人として生れ上は矢張一個の人格として之を尊敬する念が比較的多いやうに思はれる。勿論西洋と雖も中流以下社會では論外のもの多き故一概に言ふことはできまいが主として話の目あてとする點は英國の中等社會に就ての話であるが概して子供を大切な一人格として取扱ふ所は吾人の學ぶべき點が多からうと思ふ。

日本は小兒の樂園なりと外國人は言ふ、大切に小兒を可愛がるといふのだ。自分も日本人が小兒を愛することを認めるが其の愛し方にさながら犬と猫とかいふベツタア、アニマルの意味での愛しか猫が多いやうに思ふ。殊に下等社會のものに至つてはかういふ傾向が甚だしい、例へば馬鹿野郎と

稱する詞を以て小兒の愛を表出してゐるものを認めたい、父でも母でも機嫌の好い時に馬鹿野郎と言つて小兒をあやす。此れなどは非常に注意すべきことで小兒の半意識の場合に於ける被暗示性は非常に強いから斯ういふ詞を絶えず聞けば何時の間にか深く意識の根底に残つて意識が解る頃には自分ば馬鹿であるといふことが何日となしに堅い信念のやうになつて逆も偉いものになれぬといふ考を持つてしまふ。

勿論中以上の家庭ではまさか斯ういふことを言ふものは無からうがこれと同様の結果を來すべき小兒の取扱を爲せるものが多い、殊に教育に注意してゐるものが不知不識此種の弊に落ちるものも少なくない。例へばお客の前で我子の欠點を擧げて話すことは親にとつては謙遜の意かも知れぬが小兒の爲めには非常に悪しき暗示を與へるものである。或は又小兒を教訓してもそれを守らぬ場合に教へても覚えぬ場合に貴様のやうな奴は何の役に立たぬと罵つて小兒を耻かしめるやうな詞を用ふるものが多い。此等は實に兒童の人格を無視すること

の甚しきものでこれが爲めに幾多の子弟が害されしか解らぬ程である。

然らんには小兒の人格を尊重せんためにはただ譽めれば好いのであるが、猥りに譽めるのは決して善きことではない、日本では互の家庭の交際に小兒を物品の如くに賞讃することが多い、これが今日世に働けるものゝ種々の惡質を養成する基となつてゐる。譬へば小兒が綺麗な着物を着てゐるのを見て好い坊ちやんだと譽める此れがやがて小兒をして着物さへ美しければ人は世に賞讃されるものであるといふ考を抱かしてしまふ第一歩であつて今日の所謂天ぷら紳士の玉子はこゝに胚胎するのである。

此點に就て自分は嘗て大に感じたことがある。鹿兒島で講話をした時には等の主意を話すと聴講者の一人が自分の宿所に訪ねてきて言ふには「私は當地にゐる或英國の宣教師を訪ねて先生の話を聞いたことに逢つたことがある。其宣教師の家を訪ねた時母親が一人の可愛らしい女の子を携れて出てきたから私は日本流に可愛い子だと譽めた

ところが母親は様子をかへて奥に伴れて入つた。再び出てきて言ふには「あなたはなせ理由なしに小兒を譽めるのか何もせぬのに狼りに譽めると子供は稱讃を輕じ虚榮心を養ふやうになつて教育上非常に害があるから再び斯様なことを言つては困ると言つた」と其聴講者は話した。

日本の婦人にこれだけの注意を以て小兒を育てるものが果して幾人あるであらうか。此ことを考へれば我國が前途に一等國として列強と對抗するのは中々遠大な事であると思れる。然ば如何にしたならば適當な處置を執ることができやうか、それには種々なる注意が必要であるけれど就中小兒自らの働きに由つてできた業績を重じてたと些細な事と雖小兒が自分の考へと力でしたことは大に賞讃して其勞を認めてやるやうにするが好からう。着物の美しきは子兒の力ではないのにこれを譽めるのは害あつて益なきこと故例へば一人で着物を着たといふやうな場合には賞讃してやるが好い。自分の爲すべきことを當然爲した時非常に親が喜んでやつて自己を尊重するやうに導くのが

人格を尊重し人格の發現を認めてやる根本主義である。

此外に比較すれば東洋と西洋との相違は色々あるけれども有ゆる違ひと特質とは此の二つが根底をなすやうに思はれる。世の父母は是等の點に注意して家庭教育に心を用ひたならば中を得るに近いであらうと思ふ。(完)

家庭の改善

精華學校長

寺田勇吉氏談

今更改めて云ふまでもなく、日露戦争以後、我々日本人の責任は一層重大になつたのである、我々は此の戦争の結果として世界の一等國民と云ふ資格を得た。なる程露國に打ち勝つて、俄に一等國と云ふ名稱を冠せられるの榮譽を得た。得たには違はないが、悲哉、戦争以外の事に就ては未だ歐米の一等國と肩を比する事が出来ないのである。乃ち我々の體格と云ひ、品性と云ひ、氣力と云ひ、就中富の程度に於ては到底英、佛、獨等の

國に及ばぬと云ふ事は明白である。今や優勝劣敗の此世の中に於て、吾人は須臾も油斷をする事は出来ない。尙益益大に發憤する處がなくしてはならぬ。

之れに就ては種々の方法があるのであらうが、吾輩の考ふる處に由れば、先づ第一に我國の家庭を改良しなければならぬ。若し家庭にして充分なる改良が出来なければ、結局我國の發達は出来なうと云つても宜いであらう。何となれば、總ての社會のあらゆる罪惡の基く處は家庭である。家庭にして改良せられて兒童の教育にして怠られなかつたならば始めて學校教育も功を奏する。如何に學校の教師が教育に骨を折つても、今日の如く家庭が不備であつては、學校教育が功を奏することとは到底困難である。學校教育が其功を奏しなかつたならば、完全なる國民を見る事は遂に不可能であらう。

元來男子は現在を支配し、婦人は未來を支配する。従つて今日の婦人の責任は極めて重大なるものである。家庭にはあらゆる人道の要素が備はつて居

る。乃ち實地に於ける親子間の道德、夫婦間の道德、兄弟姉妹間の道德、親族間の道德、僮人との被僱人間の道德、其他あらゆる社會的の道德が家庭には備はつて居る。我輩が國民改善の基礎は家庭にありと云ふ所以である。

家庭の改良は眞に目下の急務である。若し第一に家庭の改善に力を盡さずに、猥りに社會の改良を欲するも不可能なりと自分は信するのである。而して此家庭に在つて之れを善くすると悪くするとは一に母の手にあるのである。之れが爲めに先づ第一に良き母を造らねばならぬ。然らば良き母とは如何なる母かと云ふに強健なる身體と健實なる精神とを具備せる母を云ふのである。かゝる母なればこそ始めて健全なる國民を養成する事が出来るのであらう。

元來、家庭の善惡は子孫の盛衰は勿論國家の消長に關する。乃ち家庭の善惡は個人と國家とに大なる關係を有するのである。

我國の惡德の改良は今日の青年男子を目的とし、到底其の目的を達する事を得ぬ、故に自分

は先づ今日の兒童に良模範を示して幼時より第一に良習慣を付けなければならぬと思ふ。之れが爲めには學校は勿論有力なれど、前述の如く學校に於てのみ訓練しやうと思つても家庭が其の氣にならなければ結局駄目である。畢竟幼時の教育乃ち根本教育の改良は家庭と學校との兩方に存するのである。

吾輩の言を待たず、教育は既に母の胎内に始まつて、出生後之れを怠らず、智育は別として體力と品性とは小學校卒業の頃までに完成すべきものである。中學又は高等女學校に入學後之れを改めるが如きは、爾來の經驗によれば殆んど不可能である。自分は中學生も高等女學校生徒も監理した事が在つて種々改良に就て骨を折つて見たが、惡しき家庭に於て養成せられ且不完全極まる小學校を卒業したる子弟の十中八九迄は其の改善の見込がないのである。夫故吾輩は愛國婦人會の隣地に精華學校を設立して、幼稚園から生徒を入學せしめ、今日では小學六年生迄の設がある、と云ふ事にした。精華學校には悪い家庭の兒童は一切入學

せしめない入學を申込んで來た時には先づ其の家庭が果して好きか悪きか、殊に母は如何なる人であるかと云ふ、先づ母の人となりやを充分に取調べ、然る後始めて其の子女に入學を許すの方針を執つて居る。惡しき家庭の兒童であれば、入學せしめていくら骨を折つても自分の理想的の教育が出来ないからである。

そこで、愛國婦人會の如き有力なる婦人團體に於ては、亦此の家庭の改善と云ふことに充分に努力して貰ひたいものと思ふ。果して家庭が十分に改良せられたならば、學校教育も從つて其功を奏し、遂には社會の改善も出來得るであらうと自分は堅く信じて居るのである。

保育叢話

光藤夫人

○母親の子女に對する態度

父嚴に、母慈といふ諺は、古來より親の子女に對するすべての態度を言ひあらはしたものであら

うと思ひます。
 之れが父親たる人も、常に家庭にあり母親も亦家庭にありて、両親打揃ふて子供を教養する場合でありますならば、丁度寛嚴程よく調和して、其の子の爲によかるべく思はれますが、世の實際はそうではありませんが、男子は少くとも晝間は外出して奮闘し、夜に入りて始めて家庭の人となるのが多いのでありまして、幼兒が活動盛りの晝間は大抵慈母の手一つで養育されるのでありますから、家庭教育の實際は大抵母の責任と見てよろしからうと思はれます、家庭教育の主任者、即ち母親が慈心に富んで其の子を愛撫する事のいかに人にすぐれて居まして、剛毅の徳より出ます厳重なる所がありませなんだならば、其の子はどうなるで御座いませうか、父親の嚴格なるには、恐れて服しましても、其の人は大抵自分の目の黒い中は留守勝である、こゝに於てか、我儘に陥り易い伶俐な子は、慈母の恩愛に馴れてやがては之を侮蔑しはじめます、天真爛漫なる子供は已に内心母を侮る様になりましては、不孝になるからか、

る念が起つても之を行に表さないといふ事は無論出来ません、侮蔑の舉動を母に仕向けますと、母親は快感は起りませぬ、起りませぬけれども、今迄やさしかりし己が仕打を俄かに變へるといふことは出来ないうし、一つは又溺愛の餘りマー生意氣になつた事位に考へて、大目に見て居りますと、だんだん智恵づく事の盛りな子供は、次第にそれが嵩じて來て、侮蔑される毎に小言位いふて叱つたとて、子供は已に其の侮蔑の念を遠き以前に發する事とて、容易に母親に服しません、遂に母親は與し易いと考へまして、之を畏れるといふ事を知ません、其目を偷みてはよからぬ行をする様になります、つひには度し難い人間となり下る事もあります。ダカラ無論父親は外事に奮闘する身分ではありますが、家庭教育の幾分は分擔して、常に母親の短所を補ひ、且つ之を指導する事が肝要なのであります。又良人をして、内顧の憂あらしめず、全力を外務に盡さしめて、其の成功を祈らるゝ賢夫人ならばよく、自らの短所を覺知して之を補ふべく修養し、慈母であると同時に嚴然動

かす事の出来ない不動の精神を修養して、若し萬一愛兒に過失があるとか、又は罪惡を犯すといふ様な場合があつたならば、よく其の事件を追窮して、其の心的作用を察し、若し心が正直でなくつて起つた事とか、いふ様な場合には、幼兒であるからとて、少年であるからとて、大目に見ないで、充分之を嚴責し、甚しいのは體罰を加へても、其の曲りかけし心を正道に引き直し、再びかゝるいまはしき罪惡過失を犯さしめぬ様に理を盡して之を戒諭し、出來得る限りの力を盡して、其の道を説き示し、其の過失罪惡に對して、恐れ且つ嫌惡の念を生ぜしめ、心から悔悟させる事が肝要ではありますまいか。

稻妻強盜でも、高橋お傳でも、生れ落ちました其の時の心に、かゝる大罪惡を犯さしめると、誰れが思ひ及びませう、生れ落ちし其の時の清淨無垢なる心はやがて、年月と共に四周の境遇により變りまして、心に大なるしみを作るのではありますまいか。其の心にしみの出來ます、即ち心の曲り始める其の動機は只機微の間にある事であらうと

思ひます、幼時母の目を掠めて、一錢の金を取り出した罪惡が、後年の大盜賊となりました話は、よく人の言ふ所で御座います、ア、其の一錢の金を盗み出すの時、母親が嚴重に監視して、よく其の不心得を諭しましたならば、彼れは多分善良の民となつたで御座いませう。一時の母の油斷一時の母の怠慢がかゝる悪い結果を來すのを思へば、世に母親たる人は、自ら戒めてよく我が愛兒の教養を怠つてはなりませんまい、殊に平素嚴なる父親の留守を預り、子供教育の全權を握れる母親は餘りにキビくしく、一から十まで子供を叱る必要はありませんが、否寧ろ何事も大綱を握りて、餘り萬事に關涉はしないで、しかも何事も、細密に熟知して、若し將來にわたりて災害を醸す様な惡事をしましたならば、充分に責罰して、其の災の根を絶つ事につとめなければなりません、ガカラ母親はどうしても優にやさしい其の奥に剛德を備へて、子供の男女に限らず之れが人格の模形でなければならぬのであります。

かつて學校の事にたづさはりまして、子供の事や、

家庭の様子を、よく調べました。ところが、私の實際によりまして、どうも父親のいない子、どこか缺點がある様で御座います。時には一組四十人計りの十五六歳の女兒の中父親なし兒が、五人程ありましたのが御座いました。家庭は實業家の巢窟といはれる、日本橋の中央で、數十萬の財産を擁し、多くの雇人を使用するのが三人ばかりありましたが、寡婦となりし母親は、人に知られし家丈に男勝りの點もあつたので御座います。けれど、妙に神經過敏の風がありまして、其の二人の娘が母親をつくりで、何となく、多勢の中へ出てゐる。圓満な性情の缺ける所が見えまして、チヨイチヨイ非難も御座りましたが、之等はまだよろしい方で、家庭が中以下になりますと何れもコソコンと品性が賤劣でしかもネデクレタ點がどう御座いました。

又男兒になりました。母親のみの子は、大抵成績もよろしくないとか聞いた事もありました。或は、甚しいのは前申述べました母親を、侮蔑するの念が長じまして、我儘放埒に身を持崩し、前

途有望の少年が已に、大人さへ寒心する様な罪惡を犯して、杖柱とたのみ、一步は一步と老境に近づくと、母親を、泣かせるといふ様なものもあるとか聞きしました。

女子にしても、男子にしても、何れ片親となれる子は、不幸に違ありませんが、若し此の時残りし母親が、平素からよく其の身を持ち、子供を育てるについて、よく研究の態度を取りまして、兒に對し、寛嚴宜しきに叶ひましたならばよし、片親の不幸兒でも、有爲の男子女子となつて、國家に貢獻する事が出来るであらうと思ひますが、残りし親が、いづれにしても、心を此處に用ひず我子を教化するに、其の宜しきを得ませんと、自らは勤勉勞苦して數萬の家産を作りまして、或は一世の名望を双肩に擔ひまして、其の子の代になりましては、全く見る影もなく、淋れて仕舞ふ事があります。つい片親の時の事に偏しました、が、兩親揃ふて居りまして、矢張母親が、中堅となりまして、愛兒を教養し、有爲の人となすの、責任があります以上は、母親は必ず慈母と仰がれる

其の中に、威風凜凜何人も犯す事の出来ない、剛徳を備へて、其の子が、男子でありましても、生意氣盛りになりましても、一點侮る事の出来ない母様よと、心から服し、心から仰ぐと云ふ心を湧出させる丈の徳を研ぐ心得が大切で、常に其の兒に對して、端正なる容貌と、嚴然たる心の存する態度を以て、愛兒に接する事が肝要かと存じます

○子供の恐怖心に對する用意

子供の泣くのを止めさせん爲とか、或は惡戯を止めさせんとつとむるの時、よくそれお巡查さんが來たとか、それワンワンが來たとか。それライオンが來たとか。それお化が出たとか。いろんな事をいふて、よく子供を恐れしめる風がありますが、これは余程注意すべき事柄であると存じます。私は私自己がよく幼少の折柄、蛇の恐ろしいものである事を聞かされて、何となくいやな恐ろしいものと思ふ間はまだしも、つひには其れが嵩じては、何の理由もないのに、只モーいやに恐ろしいものとの考が、深く／＼染みこみまして、若

し蛇に出逢ひますと其は大變、胸はハット動悸を打ち、頭はフラフラとする様になりまして、實に其の不愉快な事は、一日も二日も念頭をさりません。この強い神經を激動させました結果は、二度と其の場所に足を踏み入れる事が出来ないのであります。自ら戒めてなるべく恐れまじとつとめまして、幼児よりの深い印象は中々癒りませんので、今に至つても、矢張不圖蛇に出逢ひますが最後、眼の色も顔の色も變りて恐ろしくドキ／＼とするのであります。

何物を以て子供をおどかすのも、よくはありますまいが、殊にありもしない、お化けとか、幽霊とか、滅多に居もしないライオンを以て之をおどかすのは最も慎むべき事と存じます。虚言せし子供を嚴責しながら、親自らが虚をいふて平氣で居る如きは、矛盾の甚しいものではありますまいか、大泣きして止を得ざる場合でも百方心を變へさせる事につとめて、必ずおどかす事をしない様にしなければなりません、それでも泣き止まず、手段のつきました時は、實際ある動物でも何でも以

てするより外仕方はありますまい、ありもしないものを口にして、子供の泣きを止める如きは、實に其の當を得たものではありますまい。よく只一人の幼女を入湯させられるのに、泣き嫌ひて入湯を厭ひますのを、下女は湯殿の口からお嬢様をからお化けがニユツト出ますよ、とノコンと首を出し、お母様は奥の方からそれをお灸だよ、早くマツチを持てお出でと、湯殿をのぞかれ、お父様はなぐりつけるぞと叱られる、母様は湯殿で持余して居られるのを毎夜の様に目撃しました事が御座いましたが、おどかしの習慣がつきますと、却てモ一子供はきかなくなるので御座いますが、いかいなもので御座いませう。その心理状態がどうなるので御座いますか、よく知りませんが、子供の恐怖心が非常に高まるのは、生後満二ヶ年頃ではありますまいか、私は五人の子供の経過を見まして、大抵五兒が皆其の時機であつた様に思ひます。長男が満二歳の夏湖南の海に避暑しまして、神社佛閣に参詣しました時、犬を恐れライオンなどを恐れるの念強く、甚しい時

は石のライオンを見て近寄りませんでした。又長女も丁度其の頃から、暗夜を恐れる風が大變強う御座います、其の他の子も大抵同じかと存じますが、末子は母の手に育てられて、余りおどかさなかつた故か、暗夜も犬も余り恐れなないと申し居りました所が、矢張先日からの動機に因りますか、矢鱈犬を恐れ、暗夜に向つては兩手で顔を掩ふといふ風になりました、尤も此の兒が臺所に出まして何か下女の妨げをした時、下女は少々な聲で此の幼兒に囁きました様子でしたが、さて何かと思ひますと、幼兒はけたましい聲で泣き出しました。下女はモ一何も居ませんよ、皆いつて仕舞ひましたと言ふてすかして居りましたが、多分お化け犬かい出張したとおどかしたものと想像しました。之れがまさか原因となつたのではありますまいか、マ一こんな事が積りますと屹度其の兒に、抜く事の出来ない恐怖心が高まるのではありますまいか。何分此の時は極大切な時機である様に思はれますから、どうか此のおどかしといふ事を避けて、

子供を泣かさじとつとめたいと思ひます。

○下婢を雇入れる時の注意

上流の家庭に奉公して、行儀作法を見習ふとかいふ目的のものには、づいぶん教育もあり、良家に育ちました、女らしき女も御座いますが、其れでも其の家庭に雇入れまして、自家の一員としますには、よく吟味して家の不爲とならない様に心掛けなければなりません、中流下流になりますと、又一層人撰に注意しないと困るものであります。なせならば、或は貧窮の爲めに奉公するとか、逆境に身を陥れて、安心して居るべき場所がないから、奉公に出るとか、或は田舎の百姓の娘が嫁入前見習として奉公に出るとか、家庭の不和上止むなく奉公に出るとか、其の情實の種類は澤山ありませうが、之等はマゝ先づ無教育の女が多いのであります、其の無教育な女を使用して、一家の仕事を手傳はせるのは、之は主婦の最も六ヶしい仕事であると思ひます。

殊にこの東京あたりで諸々方々を渡りあるきした

スレッカラシと來たらば、其れは殆んど人間の業でないといふ様な下劣な事を常に平氣でやるのがあります。

いづれにしても、この無教育な野育ちの女を使ふ事でありますから、ツレは氣に入らぬ事の日に幾度あるか分りませんが、そこは主婦の氣をつけないければならない點でありまして、其の都度小言を以て之を直さうといたしますれば必ず失敗に終るのであります。其處に深い深い同情の念を以て、彼等の無教育なりし不遇をあはれみ、決して小言で直さうとしないで、之を教導し指導するの面倒を見てやらなければならぬのであります、一寸の虫にも五分の魂とか、之等殆んど禽獸に近い無智文盲の女でも、主婦の眞に彼等の前途を憂ひて、面倒を厭はず、見てやりましたならば必ず主婦の恩恵を感じして、少くも家の不爲となる様な事は余り爲ないであらうと思ひます、されど困りますのは之等無智の人間は余り常に同情深くあはれみの念を以て導きますれば、其の恩徳を知りて、之に狎れますが、主婦の恐るべき事を知らさ

なければ、此等無智者は統治する事が出来ませんなせならば彼等は今迄奉公に出るまで、不取締なる家庭にありて、親が彼等の不都合を責めます時は、決してやさしき言葉、やさしき舉動をあらはしたものではありません、甚しいのはコノ野郎このアマと大きなゲンコをふり舞される事もあるのです、彼等の親を恐れるのは、大抵此の暴舉即ち腕力を恐れるのであります。その女が急に奉公して、良家庭に入りまして、主人のお小言はマ―皆無といふてよろしい、只やさしき主婦の訓言を耳にするのみとなりましては、彼等は主婦の心事を察する事は無論不可能の事で、只やさしい奥様、大抵な事は叱られないから大丈夫、とてもブタレナグラレル様の事はあり相もない、氣がラク／＼としたといふ風で、すべて不都合のありました事を二度も三度もくり返して平氣な事もあるのがあります、又命ぜられた事でも、等閑にしておと共々威を示す事を忘れてはなりません、或時は嚴然と其の不都合を叱責して、彼女をして恐れし

める様な場合も大切であると存じます。而し此の手段は余り數多く用ひてはなりません、無教育なる彼等は必ず心中主婦を恨み、たちのわるい様な女は家を仇にする様な事がないとも限りません。一體家人に關係の多いこの下婢を雇ひ、之を用ひます、心得はすゐるふん大切な事で種々著述も御座いますから、こゝには余り深くはのべませんで、只子供本位の家庭の雇人のみにつき述べたいのであります。

雇人には種々ありまして、或は勝氣なもので、仕事のよくはかがゆくものがあります。或は極温和で一向仕事のはかの行かないのがあります。これはどうも一利一害で、ハキ／＼と仕事のハカドルものは家の仕事の上から見ますれば、大層よろしいので氣持のよいものであります、後者は中々ハカがユカないでダラシない様な風で御座います。私にはかつて片田舎で良家庭といはれる百姓の娘の姉妹を使つた事が御座います、一體私の家は子供多く、その上、外様のお子も數人お世話いたして居りますから、仕事もするふん多い方で御座います

から常に之に酬いてやるとの心配の絶えた事はありませんが、この少からぬ事を全うしますには、何うしても時間を制限する必要があると思いますので、下婢には、一定の時間と一定の仕事を大要定めておきまして、所謂分業制度であります、しかし此の分業制度は、余程主婦が注意しませんが主婦の眼のないう所は、カビ生ずで、どうしても主婦が全體の務を念頭におきて常に之を監督する事を忘れてはなりません。

マース様にいたしましたして、下婢は大抵夜の八時から就眠まで、習字と讀書を教へて居りますが、姉の方は極温和な性質で、よく子供のすべてを可愛がりました、彼の下女は天性子供好の様でドンナ用事も打ちやつて、子供の世話をするといふ風で暇な時には、一人は背に負ひ、三人も手を引いて野外に遊ぶのを無上の樂として居りました。ダカラ何の兒も皆彼を慕ひまして、朝目を醒ますと、彼の女の名を呼んで居りました。下女にあり易い、主人よりお小言でも頂くと、其の不平はすぐはたに居る無邪氣な子供に移り易い

のですが、彼は一向さる事がありませんでした、かゝる場合にはむしろ子供を相手にして、其の無邪氣なる子供によりて、其の不平を忘れるといふ風で御座いました、仕事の方はノロイ方で中々はかどりませんでした、自ら手を下して出來得る時間の一倍半位を與へても、中々はかどりません、で、心算に其のグズを不快に感じました。妹の方は勝氣で野育ちでよく仕事ははか取ります一定の時間の半ば以上で、チャンと奇麗に臺所で、何處でも、片付けて居ります、若いにしましては中々よく氣がつきます、頭痛がすると思へば、すぐ床を取りて頭を撫でるといふ風で、彼れの受持の仕事はよく短時間に仕上げて餘裕があるのであります、一體に氣短で怒り易く、私共がよく気分でもわるくて、口數でも少ないとすぐ不機嫌でもあるかの様に彼は氣持をわるくするので時々手コズル事があります、自然子供には不親切で、氣に向いた時はやさしく子供を取扱ひますが、大抵は七面倒なといはぬばかりな言葉使で、無邪氣な子供の仕打ちでもよく本氣に怒つたりなどして

私の目の届く中は余りキビ／＼しい事は遠慮して居る様で御座いますが、それでも今少し子供にやさしくして呉れないと子供がなかならないよと私から小言を言はずに居られない事がよくあります。姉の方でありますと、時々止を得ない事の起りました時、外出いたしますのに子供を預けても、余り心配はいたしませんでしたが、今度目は少しも安心して、預けて居る氣がいたしません、一寸外出しますにも、ゴロゴロ皆連れ出しまして、連れ出されない場合には、時々義理を缺いでも出ない事があります。

ドチラにいたしましたしても、一家に雇入れて家族の一員といたします以上子供を隔離いたさせる事は出来ません、マ―子供嫌ならば成丈近寄せない注意をするといふまで、彼等の悪感化を受けさせないといふ事は、上流の家庭を除くの外出来な事であり、無論出来得る限り母の手で、育てる覺悟でありまして、時には止を得ぬ事の爲めに日に幾回も下婢の手に委ねられる場合もあるのであります。いづれも一利一害でありまして、

ドーモ無教育な人間には、有勝な仕方ない事であり、若し雇入れて仕舞ひましたならば、其の長所を賞すると同時に、其の短所を知らしめて、之を矯正させる様につとめなければなりません、先づ目見得の中であつて、子供の少ない中ならば余り下婢の手に委ねる必要もありますまいから、勝氣なものでも宜しいで御座いませうが、子供の多い中とか、或は亦主婦が留守勝で、子供をより多く下婢に接近せしめるといふ様な家庭でありますならば、少々ノロマでも何でも他の事は我慢して、眞に子供を愛するといふ様な、温順な下婢を雇入れた方が、宜しいかと存じます。



脂肪の話

秋高ふして肥ゆるものは馬のみならず、氣温肌に宜しき此頃の好時節に、些か脂肪のお話をいたしませう。

▲脂肪の多寡 脂肪は身體の成分の主なるもの、一つでありまして、普通人體の目方の、約一割五分は脂肪の目方であると云ふことです、さうして此脂肪は全身中どこにでもあります、其分量は處に依つて一定しませぬ、但し一番多いのは、頬と臀部と掌と足の裏等で、又一番少ないのは眼、喉、鼻尖などでありませう。

▲瘦肥と脂肪 病氣其他の原因で身體の瘦せるのは、重に此脂肪の分量が少なくなるのですが、外の部分の脂肪が悉皆なくなつても、眼窩、頬、膝の隅、臀部等には、何時までも多少の脂肪が残つて居ります。

▲脂肪組織 脂肪は身體の組織中重に皮膚と筋肉との間に、皮下組織と云ふ處に溜つて居ります、

さうして其脂肪の性質は、人々に依り多少違つて居る點もありますが、その細かいことは、充分な研究が屆いて居りませぬ。

▲脂肪の効用 脂肪の役目は身體の恰好をよくし皮膚の色澤を美しくすること、身體の角張つた處の擦れるのを防ぐこと、身體の冷えるのを防ぐこと、體温の原料を貯蓄すること等でありませう。

▲脂肪と體格 男女の體格が、男子は巖疊に見え、女子は優しく見えるのは、何う云ふ譯かと申しますと、男子は皮下の脂肪組織が、婦人のやうに豊かに發達して居ない爲めでありませう、男子は、脂肪組織が貧弱なために骨組の角張つた所が、外に顯はれ、又筋肉の附着的工合を充分掩ひ隠すことが出来ませぬので、即ち力瘤などがよく見えるのであります、それに反して婦人は皮膚が華奢で、弾力に富んで居る上にその皮下の脂肪組織が誠に好く發育して居るので、骨格の角、筋肉の附着的工合が、好く掩ひ隠され、一樣に滑かに美しい圓満に發育した婦人の身體美は美術家の巧妙な味を帯びるやうになるのであります、脂肪組織

筆もよく描出することが出来ないといふほどです。▲脂肪過多 脂肪の發育が悪く、身體の甚だしく瘦せて居るのは、元より健全な美を缺いて居りますが、又度に過ぎて肥りますと、美容を損ずることになります。脂肪は素身體各部不均等に殖るますから、あまり肥り過ぎますと、身體各部の鈞合と調和を失つて見苦くなるのであります。又それのみならず、皮膚が張り過ぎますと、腹部などには、醜い條や、斑點が出来、且つ一度張つた皮膚は永久に彈力收縮の性を失つて伸びたまゝ、大きな皺となつたりして、大變見苦くなります。就中あまり肥り過ぎますと顔面が何となく鈍に見える傾きがあります。人間の顔と云ふものは、極めて狭い面積の内に鼻、口、耳、目、眉といろゝの機關が揃つて居り、それが皆特種の生理的運動をして居ります。其外に我々の微妙なる精神の働きを現はす、所謂表情運動といふ大切なことがありますから、此部の筋肉は、之を手足の如く簡單な運動をする筋肉に比べますと、非常に複雑になつて居ります。さうして顔面以外の場所では、多くは皮膚、

と筋肉の間に、脂肪の組織があるのですが、顔は筋肉の微細な運動を現はす必要から、皮膚と筋肉が、直接附着して居るのが多くあります。従つて脂肪は眼窩と頬とを除いた外は、皮膚と筋肉との間に結着する餘地が少ないのであります。而して顔面には是等の筋肉の微かな塚に細かい皺を造ります。殊に眉の邊と下唇と顎との間、小鼻と口の周圍などの皺が、最も眼に立ちます。而も是等の皺は、顔の美と、品位とを保つのに極めて必要なものであります。甚しく頬が肥え過ぎますと、前に言つた皺が深くなり、目元口元の表情が悪くなるのです。笑靨は肥つて愛らしい形容になつて居りますが、其實甚だしく肥つた顔には笑靨が出來ないのではありません。▲皮膚の色 脂肪の色は純白に少し黄味を帯びて居ります。其色が皮膚の層を透して、白くみづしく見え、特に白い脂肪層の上にある真皮の細かい血管は、下部の白いために、益々際立つて櫻色に見え透くのであります。ですから皮膚がいか程白く濃かでも、瘦せて居ては其色が充分に美し

いと申されませぬ、豊かな脂肪組織があつてこそ、始めて櫻のやうな美しい肌合となるのであります、併し或病氣に罹りますと脂肪の帯黄色が甚だしく濃くなることあります、さうすると皮膚も從て餘計に黄色を呈するやうになります、それから又身體の工合が悪しく脂肪が漸々減つて往くときは、先づ其の黄色が淡くなつて往きます、さうすると肥つて居ても、皮膚の色合がしらけて見えます。

▲其の作用 脂肪が身體の形を美しくする目的の外に、肩、臂、掌、足の裏などに多く附いて居ると云ふのは、是等の部分は物を握り、或は歩行するなどと、始終擦れる處ですから、これが瘦せて居て、脂肪の組織が貧弱ですと、起居に疼痛を覺えます、それを保護するためなのであります。

▲脂肪と温熱 皮下脂肪組織が、身體の冷えるのを防ぐことは、皆様も御承知の通りです、脂肪は温熱を傳導し難い性質でありますから、甚だしく肥つた方は從つて體内の温熱が、外に放散しませぬ、それ故に肥つた人は冬温いと共に、夏は人一

倍の暑さを感じるのであります。

▲不斷作用 脂肪の一番大切な働きは、體温の原料となることです、元來脂肪には酸素が少く、炭素と水素とが澤山含まれて居りますから、誠に燃え易く、且つ少しの分量が澤山の熱量を發生することが出来ます、さうして人の身體は、何時でも定つた溫度を維持して居らねばならぬのですから、其温熱を拵へる脂肪も、體の内では始終休みなく燃されて居るのです。

▲體温と脂肪の貯蓄 體内に於て脂肪が燃え盡されると同時に、一方では又我々が毎日の食物と共に、新たに脂肪を體内に取入れて居ります、此體内に取入れらるる脂肪の分量と、體内に於て消費する脂肪の分量とが、同じでありますとつまり體内に脂肪の餘分は残りませんが取込む方の分量が少しでも多いとそれが皮下に脂肪組織として溜るのであります、さうして病氣のため食物が思ふやうに食べられぬときには、兼ねて貯へ置かれた皮下の脂肪が、直ちに其不足を補ひますが、それでもなほ不足するときには、大切な蛋白質が減

つて往のであります、ですから此理に因て、弱い人は少し營業が不足しても、直ぐにげつそりと憔悴するのでありますが、肥つて居るものは多少營業が不足しても平氣で居ることが出来るのです。

(完)

マニラの話

小寺みさを

珍らしい服装

マニラの婦人の衣服は一寸他の國々の服と異つて居りますから御存知ない方が多いでせうと思ひます私など色々話には聞いて居りましたが殆ど想像が付きませんでして洋服でもなし支那服でもなし彼地特有な服装で一寸見ますと恰も蟬の羽子を廣げたようなもので其色合が如何にもハデヤかですからお婆さんが赤いきものを着て居るのを見ますと私どもの目には一種異様に感じられますそれですからわけて嬢様たちの集まるダンスの會などに

参りますと實に其花やかな事とても日本の丸帯紋付きとは競べものになりません。

上衣と下衣と別々

それではどんな服かと申すすと日本の着物のように肩からはをればからだ全體が包まるといふのではなく矢張り洋服のやうに上衣と下衣と別々に着るのです。

上衣とはカミサとバニエロとの二つからなつて居りまして其カミサといふのは袖と胴と付いたものでバニエロといふのはカミサを着た上に肩からかけて置くもので御座います。(圖略す)

初めて見ますと誠にをかしい物で御座いますけれども不思議なものでだん／＼見馴れましたら反つて優美なよい服装に見えるようになりまして衿は大きく開いて居ります袖も廣く出来て居りますから涼しくて如何にも着心地がよい御座いますこれを着ます前にはカミソンといつて肌着を着ますこれはキヤラコで作る美しいレースで飾を付けて置きます洋服の肌着と同じ形のもので御座います。

涼しい着物

それで此カミサもバニユエロも糊で丁度紙のやうにピンとさせて置きますから少しもからだにベタベタ付きませんでそれにどこもゆつたりとして居りますから風通しがよくて誠に涼しい御座いますバニユエロは丁度一ヤール四方位なものを疊むで肩にのせて置きますので馴れない内は邪魔で仕方がありませんがこれが一寸お愛嬌になるのです其の背加減によりつまり粹にも不粹にもなりますので娘さんたちはいろいろ鏡に向つて意匠を凝らして居ります。

地質はどんなものか
年中暑いところですから地合は極々薄い物を用ひます普通用ひられて居りますのはシナマイといつて彼地で取れます芭蕉の織維で目を荒く織つたものでサラ／＼して居りますから誠に着心地のよいもので御座いますこれより上等の物はフシとかレングとか色々ありますが之等はバイナツブルの葉の織維で織つた物ですから絹の如き光澤がありまして羽二重のような薄いものですからピンと糊で張つてありまして模様は浮織のものも又縞物もありま

すが正装に用ひますには無地の時色とか水色とかそれ／＼好みな色に繪をかゝせます其繪が實に簡短なもので重に草花ですがそれに一面に金箔や銀箔や青赤などの粉をふりかけて置きますから夜會の折などは皆此金銀箔が電氣に映じて實に見物で御座いますそれ故此品は洗濯がきゝませんから大事にしてをります又普通以下の品では木綿で絹のように織つた物や又色々に目を荒く織つてありまして染形や縞物であります一體に此國の人は横縦縞を好みますこれ等はフイリツピン人が製造するのではなくて多く獨乙や支那から輸入されて居りますマニラ市には織物の工場は一つも御座いませんし又田舎に行きましても機を織つて居るものはメツタに見受けませんでしたイロ／＼市（之れはマニラに次ぐ都會）に一二の織物工場がありますとか聞きました。

スカーツに似た下着
此下着は私がマニラに參りました當時はまだスペイン時代の風習が残つて居りました餘り變化がなくスペインの婦人服に似た後が長く二三尺引する

よになつて居るのが普通でしたが近頃は米國の新スタイルをまねていろ／＼に仕立ますこれをサヤと申ます地合は大抵更紗の大柄な模様のある丁度日本なら夜着に用ひます様な柄を用ひますがシナマイなどで作て居る人も御座います更紗が一番廉價ですから上中下の別なく用ひられますこれも皆獨乙又は英國の品で御座います絹は彼地でも養蠶を致しませんからすべて輸入品ですから非常に高價で御座いますから結婚の時の服に用ひます位で平素ドンナ資産家の娘さんでも絹のサヤは用ひません此結婚服にも普通は香港あたりから入ります縞子を用ひます近頃ミシン刺繡が流行で盛に刺繡物を用ひます。

老人でも赤い衣服を着る

色合は其人々の好みにまかせてありますから赤いものでも平氣でいゝお婆さんが着て居りますので初めて見ました時は餘り日本と異ひますのをかしく思はれましたすべて未開の國の人は赤といふ色を好むと聞いて居りましたが全く赤いズボンをはいた男が畑など耕して居りますのを見ました時

は何となくをかしく思はれました。

小さい子供が眞黒な着物を着て居る

のを見受けますこれは喪中を表はして居りますので親兄弟の喪の時は三年間黒を用ひます此時は持つ扇からハンカチーフまで眞黒ですから小さい子供などには可愛そうだと思ひますが習慣ですから仕方がありません其他は一ケ年とか一ケ月とかそれ／＼定まつて居ります。

子供のきものは異ふ

以上の服は大抵十五才以上にならなくても用ひませんでそれまでの子供は洋服を用ひます其子供の服のうちでこれは子供には樂でいゝと思ひましたのがありますからいづれ委しく御話し致します。

非常に飾處を尊ぶ

一般に男でも女でも非常に虚榮心が強くとへどんな小さな家に住んで居りましても必らずダイヤモンドの指環か耳環を持つて外出の時は飾り立てますそれ故ダンスの會などの時は前に申した通りピカ／＼光るハデな衣服を着てダイヤの耳環指環や腕環をはめ其上衿には非常に立派な首飾を致

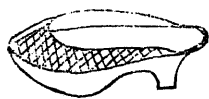
しますから、それは、奇麗に見えます矢張り芝居見物にも正装で出かけますからあちらでも日本のやうに一年に一度か二度しか手を通さないでしまつて置くといふ事なく其上此服は一年中何月でも用られますからそんなに数が入りませんからつまり着物よりも金剛寶玉の方を尊んで居ります。虚榮心の強いのは女子計りでない。マニラの青年は日本の青年とちがひ非常になり飾り立てます第一に立派な帽子を被り高價な靴を履き真白な服を附けて必らず子指にはダイヤが光つて居ります此様にみなり計り飾に居りますから殆ど頭の中はゼロです一心に勉強すると早く死ぬからとて學校も中途でやめて遊びで計り居ります中には伶俐な人もありますから日本や米國へ留学して勉強する人々もありますが大方マニラに居る學生はなまけ者が多いようです全く彼地でも非常に勉強しますと必らず病氣になります私共へもよく病人が見えましたが其方は皆學校の秀才ばかりでした實際余り熱いものですから只暇さへあれば寝る事ばかり考へて居ります此しやれるのは學

生計りでもなくボーイから駈者までそうなのです私も立派な帽子を持つて居りましたし又月給全部を出して靴を買つたりして居りました。

土人の服は支那人の服と同じもの昔から男子の服は支那人の服と同じものを用ひて居ります上衣をカミサデチノと申て之れは支那人の上衣といふ意味なので御座います之れはフイリツピンへは一番先きに支那人が入り込みました爲めでせうと思ひます。

下駄を履くのは日本人より外にないこと、思つて居りましたらマニラの人は一様異なる下駄を履きます左の圖を御覽下さい。

第一 婦人の下駄は黒塗の木に白の口を付け居ります



第二 婦人の下駄は黒塗の木に白の口を付け居ります



第三 男子の下駄は黒塗の木に白の口を付け居ります



第一圖のはバキヤと申て之れは婦人が臺所や又下女などがマレーケットへ買物に行く時とか又普通の人が履いて外出致しますが正装の時はおもひません第二圖のはコルチョコと申て之れは婦人の外出用に限られて居ります厚さは僅四分位しか御座いますせんが彼地でも余り往來を歩きますんで大方は馬車に乗りますから雨降りでも之れを用ひます初は之れを履いても少しも歩けませんでしたが馴れましたら平氣で履けるようになりますハナラがないのですから一寸六ケしう御座いますホンノ指先の所に引つかゝるだけですから歩けそうもありません不思議なもので馴れると履れます珍らしい御座いますから少し持ち歸りましてお土産に差し上げましたがどなたも履る方が御座いませんので第三の之れもバキヤと申て之れは男子用なのですから生地のみで上も皮で出来て居ります下駄を頭にのせて歩くをかしな事には雨が降つて参りますと直ぐに此下駄を脱いで頭の上にのせて歩きますいつかまだ私があちらに馴れませんか時分に向ふから婦人が何か

黒い物を頭にのせて兩手をふりながら歩いて参りますその頭の上の物が遠くで見えますと何だかサツパリわかりませんでしたでしたが近くで見ましたら黒い洋傘を一本眞直に頭の上にのせて來るのではありませんか此様にあちらの人は何でも頭の上に乗せて歩きます。

室内では何を履くかと申ますとそれはチナラスと申てあのスリパの事です彼地でも中に立派なスリパーが出来ますコルチョコに似て底がもつと薄く出来て居ります上は色々な美しいブラシ天で出来て居ります之れは男女とも同じ形で只大きいと小さいとの別があるだけで御座います男子は外出用にも致します

近年女子が靴を履く以前は婦人は決して靴を用ひませんでした近頃は年頃の娘さんは皆靴を履きます之れは芝居見物にダンスの時だけのやうで御座います男子はカミサデチノを着ました時も晴天の時はチネラスを履きますそれが赤い色などを平氣で用て居ります婦人は帽子を用ひない

婦人の髪は極簡短で大低の人は前も後も出さずに束に只頭の真中へ丸く結んで置きますそして櫛を一枚さす位なもので花をさすのでもなくリボンをさすのでもなく誠に淋しいもので御座います帽子は昔から用ひませんでしたやうで御座います近頃は追々米國式が流行致しまして髪も髪結に結ばせたり致しますあちらの髪結は誠によいお金をとります一度が大抵五圓位です上馬車を以て迎ひに参らなくては来てくれません毎日と定れば二圓づゝだとか聞きましたそれであちらではチャレて居るのがいゝのですから焼き饅ですつかりチャラせていろ／＼な其人に似合ふように結びますそしてほんとのローズの花などにリボンをあしらつてさすようになりました。

鍵を腰にさげて自慢する
あちらでも衣服はすべて戸棚に入れますそして其戸棚の鍵を銀で作らせて環に通して腰に下げますそれが多い程きものが澤山あるといふ自慢だそうで御座います。
そして外出する時は必らず扇とハンカチーフとを

持ちます。

風呂敷包を持つて歩くものは一人もない
マニラの人は男女をとはず荷物には必ず頭の上に乘せて歩きます尤も上流の人は頭の上になぞ乗せませんで皆馬車で往來致しますから馬車に乗せて居りますそしてすべて買物致しますと紙に包んでくれますからそれを馬車にのせますが馬車に乗れぬ人はチャンと頭の上にのせて歩きます何か頭にのせて歩きます時は兩手と腰とをユラ／＼と振て調子をとつて歩きますそれ故それらの婦人は髪を下の方に結んで居りますそして中心を取る爲めに自然姿勢がよくなつて居りますからお婆さんでも直ぐになつて居り腰をかいて歩いて居る人を見たり事が御座いません風呂敷包を持ちませんので大笑ひ致した事が御座いますそれはたしか日本の練習艦隊がマニラに入港致しました時でした或士官が宅へ御出で下さつた時に「奥さん、でも何か御話しがありました其時に「奥さん、でも何か風呂敷に包んで持つて歩いてはいけませんのですかし」つておつしやいますから私も不思議な御尋ね

だと思ひましたから「なせですつて何つたら」昨日上陸して市中を見物したら誰一人でも風呂敷包を捧げて日本のように歩いてる人がないからこれはキツ風呂敷を持つてはいけないのかと思つてわざ／＼之れを新聞紙に包んで來ました」つてお船の御土産を頂きましたから「別にそんなきまりはないのでせうけれども乗り此土人は布に何か包むといふ事を致しませんようで御座います」と申上たら「そうですか私も不思議だと思つた」つて大笑ひ致しました尤も支那人は太物などを風呂敷に包んで肩にかついで市中を賣つて歩きますが全く土人には見受けませんから御尤もだと思ひました。以上はたい私が思ひ出したまゝを書きつらねましたからさぞ御わかりにくい事と存じますどうぞ御判讀下さるうに願ひます。

スープの話

とよ子

二八

スープは鳥、獸、魚介若しくは野菜等をよく煮出して其物に含まれる滋養分を溶解させたものなれば其等の煮出したる後の物は全く價値なき廢物となる、さればスープは最も滋養多き汁なれば虚弱の人或は病人等の食物に適す。最も滋養あり且美味なるスープを得んとするに其一種の肉よりも多種の肉類を混合するを好とす例へば一牛肉一ポンドに鳥、七面鳥、牛、羊等の骨付き肉を碎きて之れに水一クオート即ち六合の水を入れて煮出したるもの。一牛肉一ポンドに適宜の羊肉、犢肉にハムの骨を碎きて水を六合入れて煮出したるもの。などは最も上等の製法なりとす、何故に骨付きの肉を用ふるかといふに骨付肉にはスープに必要な成分の膠質に富めるが故なり。

スープレの種類を分ちて二種となす。

一、白色スープ

二、褐色スープ

白色のスープレを製するには牛肉を用ひず、贅肉、或は雞肉を用ふるものとす、又一度炙りたる肉の殘物とか又は其肉硬くして食卓に運び能はざるが如きものあれば之を小さく切り入れて入れそれにハムの骨付き或は鹽豚肉等に水六合を入れてよく煮出して二合程に煮つゝ、時之を濾過し置けば冷却の後其脂肪は上面に浮ぶものなれば其をすくひ取るなり。

褐色のスープレを製するには前の如き原料を最初強火にて三十分煮る時は肉のカス出で、上面に浮き上るものなれば悉く掬ひ出して後は弱火にて氣長く煮るべし、若し火加減強過ぎたるか又は水多くして肉少なき等にて其色褐色を呈せず、然る時は其色を出して食欲を起せしむる事を得るなり。

即ち白砂糖を鍋に大匙一杯程入れ水或は湯を注がすよくかき廻して煮る時は褐色を呈す、之れに少量の水或はスープレを加へて溶解して後之れを前の

スープレに注ぐべし、或は褐色の粉又は葱等を剪り或は肉と丁子とをバターにて褐色になるまで煎りて入るゝも可なり。

スープレの身として用ゆるものは、米、セーゴ大麥、素麵、通心麵（マカロニ）等なり、米、セーゴ大麥は一人前に付き茶匙二杯位の割にて先づ湯出て後スープレに入るゝものとす。

素麵、通心麵、は其分量定まらずと雖多く用ひざるを好とす、之れは適宜に折りよく洗ひてスープレに入れ三十分間煮るなり、其他メリケン粉又は葛粉を玉子にて溶き軟かき捏粉を作り米粒程に丸めて入るゝもあり、又之を少しく固く捏ねて溫鈍の如く板上に延し巾三分長さ一寸位の大きさに切て用ふ之れをスープレと稱す、或は生の贅肉とベーコン（鹽豚肉）とを細かに刻み之れに麵包、葛粉、玉子、鹽、胡椒末、赤茄子、レモンの小切れ、キャチャツプ等を混合し之れを小さく丸めてバターにてよくいたためスープレに入れて用ふるもあり。

スープレを味付たる香料は、セーヂ、タイム、タラゴン、スイートマヂヨラム、薄荷、スイートバシ

ル洋芹、ベールリブ、丁子、メース、蕎蒿の種子にして此等は肉類の料理に用ふるものなり又玉葱、胡蘿蔔、蕪菁、種々のキャツチャツツ及びフース類は皆よく味を出すを得れども、最も香氣あるよきスープを製するには此等の香料を程よく用ひたるものなり、又極單純なるスープを望まば鹽と胡椒末とを用ふるを好とす。

ストックの製法
日々スープを用ふる家にてはストック即ちスープの原料を製し置かば日々生肉より煮出す等の手数を省きて、大に便利なり。

之れを製するには牛の脛肉或は脛の前部を最も好とす、又ステーキ、蒸焼肉の骨、或は鳥獸肉の殘物なる時は之れに少量の生肉を加へてもよしとす先づ牛の脛肉四ポンドをよく水にて洗ひ之れに冷水四クオート即ち二升五合を注ぎ初め強火にかけ沸騰する時は泡渣上部に浮上るを以て匙にて之れを掬ひ取り又冷水少許及少量の鹽を加へて尙其泡渣の浮ぶを助けて悉く泡渣を掬ひ取り又火にかけ六時間乃至八時間煮るなり、若し火氣強き時は

肉の纖維を硬くし且つ香氣を逸散せしむる故に火を加減大切なり、而して充分煮たる後少量の胡椒末を加へ陶器或は磁器に濾過し冷却したる後上面に固まりし脂肪を去り冷しき處を撰びて畜へ置く時は多なれば數日間保存する事を得るものなり之れを製するには一切野菜を用ふべからず、野菜は酸味を生じ腐敗し易ければ長く保つこと能はざるを以てなり。

此ストックを以てスープは馬鈴薯なれば薄切にして三十分程分量を鍋に移し水を少し加へ香味及用ひんとする野菜を投じてよく煮るべし。

野菜のストックは馬鈴薯なれば薄切にして三十分程冷水に浸して後前のストックに入れ、其他の野菜と薄切にするを良とす、此等野菜が煮えたる時は之れを裏漉にかけて再びスープに入れ、鹽加減を見て食卓に送るべし、又野菜を用ひずしてスープを濃厚ならしむるには大抵葛粉、或はコンスターチ即ち玉蜀黍澱粉を用ふ、又はメリケンを用ふるも可なり。

スープの名稱は身の種類によりて分つ、例へば大

麥を入るればバレースープ、マカロニを入るればマカロニスープと稱するが如し。

次に二三のスープの製法を記さん

アスベラガススープ

アスベラガスを三十本程を撰み其尖凡そ一位を切り放して各別々に煮るなり、軟くなりし處にて莖の方は裏漉にかけて前の湯煮したる汁に混じ置く。

メリケン粉大匙一杯をバター大匙一杯にて褐色を呈するまで煎りて、スープ原料三バインド即ち九合を加へて前の裏漉したるアスベラガスと共に凡そ一時間程煮て、クリーム大匙三杯、若しくは牛乳四五勺を温めて入れ、次に、菠薐草をよく洗ひ湯煮て、搗碎き少量の水を加へ布中にて包みて其汁を搾り込み、前に湯煮たるアスベラガスの尖端を入れ身として直ちにテーブルに送るべし。

オックステールスープ

牛尾一本をよく洗ひ關節毎に之を切り放し、バター一オンス、薺、洋芹の嫩芽を二葉づゝ、玉葱二個、胡蘿蔔一本、蕪菁二個を細かに切り、ハム

の薄切適宜に入れ先づ水半バイントを以て蒸煮に暫時の後、二クオートの水を加へ、四時間文火にて煮たる後之れを漉し、少量のコンスターチを水にて溶き加へて汁を濃厚ならしめ、鹽胡椒末を適宜に入れ、ポットワインを大匙一杯と少量のキヤチャップを加味して、前の牛の尾の肉を少量投じて實となす。

グリーンビー、スープ

生豌豆三バインドに水三クオートを入れて軟くなるまで湯煮て、之れを裏漉にかけて其汁に漉し込み、バター大匙二杯、鹽、胡椒末適宜に加へ、温めたる牛乳一合、若しくはクリームを注ぎて尙生豌豆を一バインド入れ、軟かになりたる時コンスターチを少量の水にて溶解して汁を濃厚ならしむ、身にはパンを薄く切り之れを小さき骰子目に切りてバターにて煎りカラ／＼となして加ふ。

オイスタースープ

牡蠣一クオートに水一バインドを加へて火に懸け浮き上りたる泡渣を取り除き、之れを漉し牛乳一バインドを温め、之れに前の牡蠣を入れ暫時の後

食卓しょくたくに送おくるべし、此このスープを製せいするには金屬きんぞく製の鍋なべを用もちふべからず、必かならず土鍋どなべにて料理ちりするものなり。

雜錄

●本會の夏季講習會 忙餘の閑を偷ぬすんで企てたる本會の夏季講習會が常に多大の好結果を得ることは是れ偏に會員諸君の熱誠に因るものにして幹事一同の常に感謝なりとす。本年も久し振りにて第三回の夏季講習會を催はせるに一昨年よりも盛大なる好結果を得豫定の科目を悉皆無事に講了することを得たるは幹部一同の深く感謝する所なりとす。然るに不幸にして講習終了の日より彼の大雨にて東京附近は近年稀なる大洪水となり諸處の道路不通となり講習員諸子にして歸郷の便を得ず空しく滞在せらるる方多數なりしは天災とは云へ誠に御氣の毒の事なりき。

講習中は會員方より種々なる御懇話を拜聽することを得て本會の事業上に多大の指教となりしこと

多し、是亦講習の賜として役員一同の悦ぶ所なり本會は今や内部改革の計畫中にあり。近々會員諸君に之を報ずるの機會あらん。

○高島氏の心理講演會 昨年の春頃より本會研究部に於て開催せる高島平三郎氏の兒童心理講演は二回共に熱心なる會員諸君に因りて愉快に完結せられ、爾後青年期の心理に就て引續き開講の筈なりしが本會の都合と先生の御多忙なりしとの爲に延期して今日に至れり。然るに幸に先生も時間に多少の餘裕を得らしに因り本會は茲に引續き第三回講演會を開くこととし目下其準備中なり。開講は多分十月中旬の事なる可く時日等は追つて、はがきを以て各幼稚園宛て御通知申す筈なれども或は御通知洩れの有らんも計りがたし。聽講御希望の方は本誌御覽の上は即刻御問合下されし。

開講は十月中旬



底ぬけ釜

久留島 武彦

よく肥た牝鶏一羽、毎日市に買物に行くのを、藪ぎはの穴の中から見て居りま
した悪狐二疋、どうかしてあのうまそうな奴を捕へたいものだ、いろ／＼工
夫して見ましたが、戸外に出た時では、羽の生て居る自由の身體、走ると飛ぶ
のをかねて居るので、とても捕へる事は出来そうにもない、これはうちに居る
時をそつと行つてつかまへるに限ると、毎日二疋の狐はかはる／＼、鶏の御家
をのぞいて見ますが、此の牝鶏はなか／＼用心深いたちと見えまして、家に居
る時も、戸外に出る時も、必ず、キッチンと錠を下して、とても忍んで入るなど

と云ふ事は出来ません。

それでも二疋は毎日々々この牝鶏をつけねらつて居ましたが、一日一疋は何かうまい工夫を案出したと見えて、にこ／＼しながら、戸棚の中から大きな袋を引出して、これを引擔いで出てゆきました。

牝鶏はこんな事などは些とも知らず、今日も平素のやうに市に買物に行きました、いろんな重い物を一籠提て還つて來ましたが、戸口の錠前を脱した時、最前から隠れて待つて居ました悪狐は、何と思つたか小石を拾ふて、彼方の藪にバサリと一つ打込みました、此の物音にビツクリ致しました牝鶏は、何の音かと藪の方に二歩三步あと戻りをした時、狐は素早く戸を押開けて、家の中に飛込むとその儘、隅の方に身を縮めて隠れて仕舞ました、物音に驚いた牝鶏は、暫く氣をつけてその附近を見廻りましたが、何の事もないので戸をあけて家に入り、また元の様に錠を下して、やれやれと一呼吸つきました時、片蔭から飛出した狐は、唐突大袋の口をあけて牝鶏の頭の上からスツポリと打被せまし

た。

しめたッ！と狐は小躍して、袋の口をちめやうとする時、ク、ク、ク、ク、と云ふ牝鶏の啼聲が頭の上になりますので、驚いて仰向いて見ますと、袋の中に入れたと思ふた鶏は、いつかすり脱けて棚の上にとまつて居るのです。

逃たつて最う大丈夫だ、戸には錠が下りて居るし、こゝから外にはでられないのだから、御前の命はないものと思へど、しきりと下では威張つて見ましたが、羽のない狐にはどうする事も出来ず、怖い眼ばかり釣上げて鶏を睨んで居ますうち、何と思つたか狐はぐるりと身體を廻して、自分の尻毛の尖端をいつかりと口に喰へますと、その儘ぎり／＼舞を始めました。

くる／＼くる／＼獨樂より早く回るのを牝鶏は一心に見詰て居りますといつか眼が變になつて来て、頭の中がふら／＼ふら／＼、しまひには自分の身體までふら／＼搖ぎ出したと、思ふ内、眼を眩して眞逆様に落るところを、狐は手早く袋をひろげてすばり受込み、そのまゝ引擔いで歸りました。

牝鶏は袋の中に逆様に押込まれて、地面を引ずり／＼擔がれて行ます内、漸と正氣にかへりましたが。氣が付いて見ると狐の穴に運ばれて居るので、これは此のまゝにちつとして居ては大變と、いろ／＼遁げる工夫をして居ます中、不圖よい考が浮びました。

それは成丈ばたついて居ると、袋を擔ぎ悪いから、狐はきつと憊むにちがひない、憊めば袋を置くに違ひない、置けば狐はきつと晝寢をするのが癖だから居睡りをするに違ひない、そうだ其の中に遁出そうと、牝鶏は出来るだけ大きく、出来るだけ乱暴に羽を擴げてはたついて居りますと、狐は背負ふてゆくのが重くて耐らず、暫く休んで行く事にしやうと、牝鶏の考へた通り、日當りのよい松の木影に袋を置いて一呼吸ほつとつきましたが、いつもの癖はこんな時にも出て、狐はいつかふらりと居睡りを始めました。

小さい鼯の聲がようやく袋の中まで聞える様になりましたので、牝鶏はもう大丈夫だと前懸の袋の中から剪を取り出し、ちよきりと、袋の底を截つてそつ

と頭あたまだけ出して見みますと、狐きつねは顔かほぼーつと赤あかくして、いゝ心地こころちで睡ねむて居ゐります。
 もう之これなら大丈夫だいじやうぶだと、大おほきく袋ぶくろに穴あなをあけて、悠々いゆういゆうと出でてきました。寢坊ねぼう
 の狐きつねはまだ眼めが醒さめず、ぐうぐう高軒たかいびきで睡ねむつて居ゐますから、その間まに牝鶏めんどりは手
 早く附近あたりの大おほきな石いしを身替みかはりに一つ袋ぶくろの中なかに押込おしこんで、その後あとを糸いとで縫ぬひつけ、
 そのまゝ家うちへ遁にけて歸かへりました。
 暫しばらくくして目めが醒さめた狐きつねは、袋ぶくろを見みますとおとなしくなつて居ゐますから、それな
 らもう世話せわもあるまいと、引ひかついたが大變たいへんな重おもさで、前まへよりも倍はいですから、
 はてなと一度いちどは不審ふしんにも思おもひましたが、さつきは生いきてバタバタして居ゐた
 から輕かるるかつたのであろうと、その儘まま疑うたがひもせず自じ分の穴あなに引ひずりぐえつち
 らおつちら持もつて還かへりました。
 穴あなでは待兼まちかねた同おなじ惡狐わるきつね、門口かどぐちに出でて居ゐますと、大おほきな袋ぶくろをさも重おもそうに引ひず
 りぐ背負しよつて歸かへつてくるのが見みえるので、さてはしめたと大喜おほよろこびで早速さつ台所だいどころ
 の大釜おほがまにお湯ゆを沸わかして待まつて居ゐますと、漸やうやくの事ことで背負しよい込こんだ袋ぶくろをその儘まま大

釜かまの傍そばまで持つて來きました。

さあ蓋ふたを開あけろ、それ袋ふくろの口くちをあけると、二疋ひきがゝりて釜かまの上に逆さか様にした鶏にわとりの正しやうたい体たいは、はづみをくつて沸湯ふいゆの中にトブンと落おちこ込んだのを見みますと、思おもひもかけぬ眞黒まっくろな大石おほいしで、あつと驚おどろくひまもなく、お釜かまの底そこは打拔うちぬかれて、ザーツと流ながれ出でました沸湯ふいゆは二疋ひきの狐きつねにすつかり懸かり、眞赤まっかに火傷やけどをいたしました上うへもう二度と再び穴あなから外そとへ出でる事ことさへも出で來きなくなりましたと云いふ。

めでたし／＼

太郎さんと次郎さんの話

と よ 子

太郎たろうさんと次郎じろうさんとは、或ある夏なつの夕方ゆふがた仲なかよく二人ふたりで濱邊はまべを散歩さんぽして居をりました、涼すずしい風かぜがソヨ／＼と吹ふいてまゐりまして、何なんとも云いへないよい心こころもちで御座ございます、やがて太郎たろうさんと次郎じろうさんとは大おほきな松まつの木きの根ねに腰こしをかけ遙はるかに沖おき

合あひの方ほうをながめて居ゐりました、

すると突然とつぜんに次郎じらうさんは、海うみのむかうの方ほうから夕日ゆふひをうけて走はしつて來くる帆掛舟ほかけふねを指さしまして。

「マア兄にいさん、何なんと綺麗きれいな帆ほではありませんか、

まるで雪ゆきのやうに眞白まっしろく見みえます、あの布ぬのは何なんでせう？」

と尋たずねました、太郎たろうさんは之これをきゝまして、たゞ黙だまつて笑わらつて居ゐりました。

やがてその帆掛舟ほかけふねがだん／＼と濱邊はまべに近附ちかづいてまゐりました、近づいて見みますと、こはいかに次郎じらうさんの雪ゆきよりも白しろいと思おもひました帆ほは、見みるからにきかない、方々ほうくにつきが一いばいあたつてゐます、どす黒くろい布ぬのでありました、次郎じらうさんは之こを見みまして、たいそう喫驚びっくりいたしまして、

「マア兄にいさん、なんときたない帆ほなのでせう、方々ほうくにはつぎが一いばいあたつてゐますし、色いろはどす黒くろでまるで御おへつつい様さまにはいつてゐた白猫しろねこみたやうな色いろですのに、どうして先刻さつきはあんなにきれいに見みえ

ましたのでせうか」

と、不思議そうに太郎さんにききました、太郎さんは、

「それは先刻は遠方ではあるし、夕日をうけてゐたのであんなに眞白に綺麗に見えたのです、ですから物事は何によらず、充分に觀察し充分に研究した後でなければ決して判斷は下すものではありません、そばで見ればこんなに汚れてきたならしい帆でも、遠くでは先刻のやうに美しく見えます」

と教へました。



すずく

本會事務所
移轉廣告

本會儀今般都合ニ因リ左記肩書ノ
所ニ移轉仕候爾今一切ノ用件ハ同
所宛御申越下サレ度候

明治四十三年十一月

東京市本郷區元町二丁目六十六番地
櫻蔭會事務所內

フ
レ
ー
ベ
ル
會